

2021. 11. 16 (火)

コロナ禍で考える、共感し伝えることの大切さ

鳥羽美鈴

異なる文化間の交流

多文化共生をキーワードとして研究を進めていますので、本日は、これに関わる2つの専門用語の紹介から始めたいと思います。まず、「多文化主義」というものですが、皆さん、聞いたことはあるでしょうか。異なる文化的集団、共同体の存在を認めましょう、というのですが、例えば、私が主な研究対象としているフランスは、伝統的なキリスト教国ですが、イスラム教や仏教を信じる人々の集団も認めましょう、ということです。宗教だけではなく、中華系の人々、日系の人々の集団、こういった共同体もあり得ます。フランスではこのように多様な文化が存在しますが、公的には、多文化主義は掲げていません。また、カナダのように多文化主義を掲げているところでも、周辺化や断片化につながるとして、これを批判する声があります。異なる共同体の存在を認めた場合、中心にある共同体と周辺に置かれる共同体の間に、上下の関係が生まれてしまう、また、国家としてまとまらなくなってしまう、分化する恐れがある、という考え方です。このような批判のある多文化主義に対してカナダのケベック州でそれに対置されるものとして提唱されたのが「間文化主義」というものです。文字通

り、異なる文化の間の交流を大切にしようというものです。さらに、共同体間の平等な関係性を重視します。多文化主義、間文化主義、それぞれの是非については、皆さん、学部での学びのなかで、自分で考えてもらいたいと思います。

「相手の立場に立って考える」ために

これらの共同体の話 personal レベルに転換すると、まさに本日のテーマである共感と重なりあうのではないかと考えました。そもそも、共感する、とはどういったことか、これは難しいですね。私も今回のテーマを機に考えてみましたが、共感とは、相手の立場に立って考えること、ひいては、相手そのものとなって、同じように喜びや悲しみに心揺さぶられる経験をすること、このようなことかと考えました。そのために必要なこと、それは共同体の話で触れたように、交流する、意見交換するなどして相手の状況をよく知ること。外国人、障害を抱えた人、経済的に困窮している人、いろいろな人がいますが、そういう人たちの立場になって考えるといっても、自分がそうでない場合には、なかなか共感するというのは大変です。犯罪者や被害者、といっても、直接意見を聞くことも難し

いでしょう。その場合に大切になるのが、学部での学びです。社会学部ではインタビューなども多く実施しますが、聞き取り調査をした人たちの声を聴いたり、それに関わる研究成果が書かれた書籍を読んだりして、情報を収集することが可能です。

うなずき、という非言語表現

コロナ禍においては、共感を示す大切さ、というものも実感させられます。うなずき、という非言語表現がありますが、ZOOMなどのリアルタイム型の話し合いで、聞き手たちのうなずきを確認できた相手はパフォーマンスが上がるという実験結果がありました。社会言語学の分野では、日本人のうなずきの回数を他国のいくつかの国の人々と比べた調査もあります。その結果は、日本人のうなずきの回数は、他国の何倍にもなるというものでした。なぜそのような結果になったか分かりますか。文化が異なると、うなずきの意味合いも異なるのです。日本文化に馴染んだ人々の多くは、「はい、はい、聞いていますよ」という意味合いでうなずきます。それに対して、他文化の多くにおいては、「理解しました」、「了解しました」、「賛成です」といったような意味合いを込めてうなずきます。

そのため、うなずく回数は少なくなります。

そして言葉

皆さんは、オンライン授業を受けていて、教員や他学生の反応が少なく、本当に自分の言葉を聞いてくれているのだろうか、相手に伝わっただろうか、と大変不安に思ったことが何度もあるのではないのでしょうか。外国の報道で、オンライン授業によって体調を崩す、またはストレスが原因で退職する教員が増えている、と耳にしました。教員たちはビデオをオンにしているのに対して、学生たちは多くがビデオオフを選択し、反応が全く見えないまま授業を進めなければならないことが教員側のストレスにつながったというのです。これらから分かることは、非言語コミュニケーションのうなずきや表情、そして言葉というものが、いかに大切であるかということです。最後にまとめになりますが、皆さんは、学部での学びを通して、共感する力を身に着けるとともに、表情を豊かに、と言ってもマスク着用や画面越しでは限界もあるでしょうから、より一層、言葉というものも大切に使用して、共感を示すように心がけてください。

(社会学部教授)